

「救出救助部隊員として活動して」

警備部機動隊（男性）

発災時、自宅で妻と息子と休日を過ごしていた我が家も、大きな揺れに見舞われ、食器は棚から飛び出し床に散乱し、ひどい有様となったが「とにかく行かなければ。」としか思い浮かばず、直ぐに機動隊に向け車を走らせていた。

これには妻の協力が大きく、泣く息子をなだめ、自宅をテキパキと片付けながら「家はどうにかする。早く行って。」という言葉に心配なく出動できることがありがたかった。出勤途中、ラジオから流れる震災情報も曖昧な物で詳細は判明せず、すれ違う緊急車両が県内での被害を想像させ、緊張の高まる中で機動隊に到着した。

岩手県陸前高田市に出動したが、全域が壊滅的な被害を受けており、信じられない光景が目の前に広がっていた。地面には津波で流された思い出の写真が散乱し、その全てが表を向いているように見え、我々に「早く見つけてくれ。」と訴えているかのようで、正直、胸が苦しくなった。大量の瓦礫の中を搜索するほど御遺体が続々と発見され、本来の目的である生存者の救出には至らず、無力感と徒労感が日を追うごとに増して行った。

そんな時、遺族が見守る中で活動した現場で、涙ながらに謝辞を頂いたとき「生死に関わり無く大切な存在を家族の元に還す」ということも救助に値する行為であることに改めて気づき、以降「たとえ、万分の一だとしても、一人でも多くの大切な存在を、帰りを待つ家族の元につれて帰る。」と強く決意し搜索活動を続けた。

今回の震災出動を通じ、現場で使用できた高性能資機材は僅かであった。必要なことは、部隊判断による積極的な活動と隊員間の協力、基本に根ざした応用と閃きによる現場調達品による活動で「救助とは『なんとか助けたい。』という心でするものだ。」ということ強く感じた。